

人生の彩(いろどり)

# 晴れ看

平成9年3月22日(土)~  
5月11日(日)

 狭山市立博物館

## 開催にあたって

私たちの日常生活の中で、「衣」は必要不可欠なものであり、また時間的経過から見れば、人類の歴史とともに始まり、ともに歩んで来たといえましょう。

この「衣」を民俗学的に分類してみると、「ハレの衣」と「ケの衣」にわけることができます。「ハレの衣」は、人の一生の通過儀礼の中で着られる「晴れ着」をさし、「ケの衣」は、それ以外の普段着や仕事着をさします。

この「晴れ着」を、人は一生の間に少なくとも3回は着るといわれています。まず、生まれてからすぐに着る産着、生まれてから31~33日目に着る宮参り着、神の加護から離れ、子供へ成長したことを祝う七五三の衣裳、子供から大人へ仲間入りする成人式の衣裳、人の一生の中で一番華やかな婚礼衣裳、長寿を祝う年祝いの衣裳、人の一生の最後の儀礼となる葬式の衣裳などをあげることができます。

このたびの企画展は、人が生まれてから死ぬまでの通過儀礼の際に着られた「晴れ着」について、衣裳・古文書・写真や俗信などにより展示・紹介いたします。

最後に、本企画展の開催にあたり、ご指導・ご協力を賜りました皆様方に心より厚くお礼を申しあげ、開催のごあいさつといたします。

平成9年3月

## 狭山市立博物館

### 関連事業

#### ◆講演会

演題 『人の一生の通過儀礼』

日時 平成9年4月6日(日) 午前10時~

講師 埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課

副参事 大館 勝治氏

場所 狭山市立博物館 研修・講義室

\*聴講希望の方は、3月22日(土)から狭山市立博物館へ電話でお申込みください。(定員50名)

#### ◆開館時間

午前9時~午後5時

#### ◆休館日

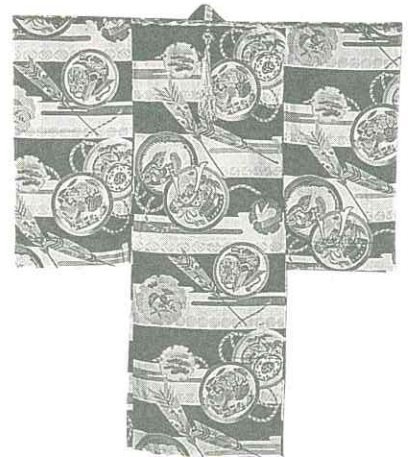
3/24、3/28、3/31、4/7、4/14、  
4/21、4/25、4/28、4/30、5/6

#### ◆入館料

一般150円(100円)  
高校生・大学生100円(60円)  
小学生・中学生 50円(30円)  
※( )内は20名以上の団体



帯解きの着物 奥富悦也氏蔵



一つ身(背守り付) 奥富康裕氏蔵



〒350-13 埼玉県狭山市稲荷山1-23-1 稲荷山公園内  
TEL.0429-55-3804 FAX.0429-55-3811  
■交通/西武池袋線「稲荷山公園駅」から徒歩3分  
西武新宿線「狭山市駅」西口からバス  
(稲荷山公園駅行) 終点下車徒歩3分

人生の彩(いろど)り

# 晴れ番

平成9年3月22日(土)~

5月11日(日)

 狭山市立博物館

# 開催にあたって

私たちの日常生活の中で、「衣」は必要不可欠なものであり、また時間的経過から見れば、人類の歴史とともに始まり、ともに歩んで来たといえましょう。

この「衣」を民俗学的に分類してみると、「ハレの衣」と「ケの衣」に分けることができます。「ハレの衣」は、人の一生の通過儀礼の中で着られる「晴れ着」をさし、「ケの衣」は、それ以外の普段着や仕事着をさします。

この「晴れ着」を、人は一生の間に少なくとも3回は着るといわれています。まず、生まれてからすぐに着る産着<sup>うぶぎ</sup>、生まれてから31～33日目に着る宮参り着<sup>みやまいぎ</sup>、神の加護<sup>かご</sup>から離れ、子供へ成長したことを祝う七五三の衣裳<sup>いしやう</sup>、子供から大人へ仲間入りする成人式の衣裳、人の一生の中で一番華やかな婚礼衣裳、長寿を祝う年祝い<sup>としいわ</sup>の衣裳、人の一生の最後の儀礼となる葬式の衣裳などをあげることができます。

このたびの企画展は、人が生まれてから死ぬまでの通過儀礼の際に着られた「晴れ着」について、衣裳・古文書<sup>こもんじよ</sup>・写真<sup>ぞくしん</sup>や俗信などにより展示・紹介いたします。

最後に、本企画展の開催にあたり、ご指導・ご協力を賜りました皆様方に心より厚くお礼を申し上げ、開催のごあいさつといたします。

平成9年3月

狭山市立博物館

## 関連事業

講演会 『人の一生の通過儀礼』

日時 平成9年4月6日(日) 午前10時～

場所 博物館 研修・講義室

講師 埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課

副参事 大館 勝治氏

# 晴れ着について

**晴**

れ着とは、人の一生の通過儀礼の中の“晴れの日”に着る衣裳をいいます。

だれでも少なくとも3回は身につけるといわれ、礼装・正装・式服・忌衣などをさします。人の一生の通過儀礼を人生儀礼かんこんそうさい・冠婚葬祭もふくともいい、喪服もこの中に入ります。

まず、生まれてからすぐに着る産着、生まれてから31~33日目に着る宮参り着、神の加護から離れ、子供へ成長したことを祝う七五三の衣裳、子供から大人へ仲間入りするときに着る衣裳（現・成人式）、人の一生の中で一番華やかな婚礼衣裳、長寿を祝う年祝いの衣裳、人の一生の最後に着る死装束しにしょうぞくなどをあげることができます。

## “ハレ”とは

“ハレ（晴れ）”という語は、一面でめでたい喜びの感じを持ちますが、晴れの日、晴れの場所など、普段と違った日、公の場所などを意味します。

“晴れの日”とは、盆・正月・氏神祭のような年中行事のある日、誕生日・宮参り・七五三・成年式・婚礼・葬式など人の一生の大事に当たる日のことで、“晴れの場所”とは、そうした儀礼をおこなう場所や、国家儀式、公共機関の祝賀、社交の場などをさします。

## “ケ”とは

“ケ（褻）”という語は、“晴れ”の対語で、公の場所ではない普段の生活や日常を意味しています。このときに着る衣裳を、“普段着”“仕事着”といいます。

**産**

着とは、生まれた赤ちゃんを産湯うぶゆにつかわせた後に着せるものです。地域によっては、宮参り着のことをさしたりします。現在は出産以前から用意しているようですが、昔は生まれてから用意するものとして、前もって作ることはしませんでした。生まれた赤ちゃんは産湯を済ませると、「おくるみ」という布で包んでいました。産着は、その後に里の親や親戚の人たちが贈ってくれました。

産着は、男の子の場合は青い麻の葉模様が染めてあるもので、女の子の場合は、黄色か赤の麻の葉模様がほとんどです。

麻の葉模様については、麻のようにすくすくと丈夫に育つようにとの願いがこめられています。また、麻の葉の着物や一つ身ひとみ\*1の着物には、必ずといってよいぐらい「背守りせもり」がついています。「背守り」とは、麻の葉の着物や一つ身の背中につける飾りのことで、この世に取りあげられたばかりの赤ちゃんを、魔物から守るための「まじないのしるし」とされています。



麻の葉の産着を着た赤ちゃん

井上 浩氏 蔵

## 宮

参り着とは、里の親から贈られた嫁ぎ先の家紋が入った“ハレ”の産着のことで、生まれた赤ちゃんをしゅうとめ 姑が抱き、母親と三人で氏神様へお参りに行きました。

このときは、背縫いのない着物を着せると魔がさすといわれ、背縫いの代わりに美しい色糸の「背守り」をつけました。

この日は、赤飯を炊いて氏神様へ供え、神社にお参りに来た人たちや遊んでいる子供らにもふるまい、仲人や親戚・近所などにも配りました。

○狭山市では、男の子のお宮参りは31日目で、女の子は33日目がほとんどです。全国的にお宮参りの日を見ると、早いところでは7日目とか21日目、遅いところでは100日目というものもあります。また、この日は産婦の「うぶ明け」とか「おび明け」「うぶや明け」ともいい、家族の者と同じ食事をして普段の生活に戻りました。いずれにしろお宮参りは、生まれた赤ちゃんが初めて社会的に承認されるとともに、成長を期待され祝福される機会でした。



宮参り着  
久保田与一氏 蔵

## 七

五三とは、子供が成長していく過程で、3歳・5歳・7歳と無事に生育することを祈願する儀礼をいいます。男の子は3歳と5歳、女の子は3歳と7歳を主とし、11月15日に「晴れ着」をまとい、神社などへお参りに行きました。

## 三

3歳の衣裳は、男女とも三つ身みみみ\*1に裁ったメリンスや金紗きんしゃの着物、また、男の子は銘仙めいせんか緋かすりの筒袖つつそでの着物、女の子は友禅ゆうぜん、富士絹ふじぬ、メリンスなどの元禄袖げんろくそでの着物が嫁の里から贈られ、それを着せてお宮参りをしました。

この祝いは、一つ身の着物から三つ身の着物に変わるところからミツミイワイ（三つ身祝い）といったり、ミツツノイワイ（三つの祝い）といえます。

この日は、氏神様に両親と子供が一緒に参拝し、今まで無事に守り育ててくれたことに感謝するとともに、今後の守護を祈願し、赤飯を供え物としてささげました。また、境内に来ている人たちにも赤飯をふるまい、その後里の親や仲人・親戚などへもこれを配りました。

○狭山市では、3歳の祝いを「三つ身の祝い」といっています。三つ身の祝いとは、3歳まで着ていた着物が一つ身裁ちで背中に背守りという魔除けのついているものから、三つ身の着物に着替えるので、このような言葉で呼ぶようになったと思われます。

## 五

5歳の衣裳は、黒の羽二重はふたえの紋付羽織はかま・袴じしまに、地縞ぢまか緋かすりの着物を着せ、白足袋たびと駒下駄こまげたをはかせ、扇子せんすを持たせて祝いました。

一般的に「袴着はかまぎの祝い」といい、11月15日に男の子だけが祝ったといえます。

この日は、「三つ身の祝い」と同じように、嫁の里から贈られた「晴れ着」を着ました。

なお、三つ身の祝いを女の子の祝いとしているところでは、男の子の祝いを「男の子の帯解おびとき」というところもありました。

○狭山市では、戦前・戦後を通じて、内輪でごく簡単に済ませたといいます。ただ、3歳・5歳・7歳と子供がそろった場合は、5歳の祝いをおこなったといえます。

## 七

歳の衣裳は、男の子は紋付羽織・袴に筒袖の緋の着物、女の子は黄八丈などの縞物や無地の元禄袖の着物、本裁ちの着物や四つ身<sup>よつみ</sup>\*1の着物を着て氏神様へお参りに行きました。

この祝いは、「帯解の儀」といわれ、子供の祝いの最後になります。これを祝う子供のことを「ひもときっ子」といいますが、これは紐つきの着物から、初めて帯をしめ、四つ身の着物を着るからです。

この帯解まで子供は神様の子といわれ、帯解が済むと神の手を離れて人間の子供の仲間入りをします。これを氏子入り<sup>うじこ</sup>などといい、盛大に祝いました。

この日は、家では尾頭付きの魚を用意し、赤飯を炊いたり餅をついたりして氏神様へ供え物としてさげました。境内に来ている人たちにもふるまい、里の親や仲人・親戚などへも配りました。

## 成

人の衣裳は、男子は羽織・袴、女子は振袖<sup>ふりそで</sup>を着ました。現在は、男女とも満20歳でこれをおこないますが、かつては男子は15~16歳、女子は13~14歳でおこなわれ、それぞれ成年式・成女式といい、一人前の大人として扱われました。このとき、男子はフンドシをつけ、紋服を用意し、女子は茜色<sup>あかね</sup>の腰巻きをつけ、カネツケ<sup>はぐろ</sup>といってお歯黒をつけることもありました。

これは、通過儀礼のうち、子供から大人の仲間に入ることを社会的に認めてもらうための重要な儀礼でした。

○狭山市では、17~18歳くらいになった男子は、神奈川県伊勢原市にある大山阿夫利神社に参拝し、大人の仲間入りをしたといえます。これは、成人祝いに登山をすることによって肉体的試練を経ると同時に、神に参拝してその加護<sup>かご</sup>\*1を得るといもので、これを「初山参り」といいました。

女子の成人祝いは、人によってそれぞれ違います。これは生理的变化によるもので、初潮<sup>しよちよう</sup>を見たときに赤飯を炊いて祝うことが多いようです。この赤飯は親戚へも配り、「これからもよろしく」とあいさつをするといえます。このことを「はながさいた」という家もあります。

## 婚

礼衣裳は、男性は紋付羽織・仙台平の袴に着物を着て、女性は持ち合わせの中から良いものを選んで着ることが多く、江戸袷<sup>えどづま</sup>\*1に白無垢<sup>しろむく</sup>を重ね着して、他に振袖<sup>ちゅうふりそで</sup>\*2・中振袖<sup>ちゅうふりそで</sup>\*3・留袖<sup>とめそで</sup>\*4などを着ていたようです。

男女ともに成人になると、次に迎える通過儀礼として大きな節目に当たり、人の一生の中でも一番華やかなものといえるでしょう。

○狭山市では、嫁はまず肌襦袢<sup>はだじゆばん</sup>を着て、次に長襦袢、その上に白い長着二枚、あるいは白と黒の長着各一枚、あるいは「型の着物」といって黒地に白い模様を染め抜いた長着を着て、一番上に黒のヒッカエシ（シッカエシ）を着ました。黒のヒッカエシは、縮緬<sup>ちりめん</sup>で嫁の実家の紋が入っているものですが、家によっては裾に模様のついた留袖（江戸袷）を着、白い長着とアイアカ<sup>あいか</sup>といっって緋色の長襦袢を着ることもありました。



婚礼衣裳

沼崎一郎氏蔵

## 年

祝いとは、特定の年齢に当たって息災を祈り祝うことで、数え年61歳の還暦<sup>かんれき</sup>\*1、70歳の古稀<sup>こき</sup>\*2、77歳の喜寿<sup>きじゅ</sup>\*3、80歳の傘寿<sup>さんじゅ</sup>\*4、81歳の半寿<sup>はんじゅ</sup>\*5、88歳の米寿<sup>まいじゅ</sup>\*6、90歳の卒寿<sup>そつじゅ</sup>\*7、99歳の白寿<sup>はくじゅ</sup>\*8、100歳の上寿<sup>じょうじゅ</sup>\*9の祝いがあります。

○狭山市では、年祝いとしておこなわれているのは喜寿と米寿くらいです。喜寿の祝いには、親戚や隣近所へ火吹き竹に水引きをかけて贈ります。これは息が長く続くようにとのことから始まったといいますが、近所で火事があったとき、火に向かってこれを吹くと火の粉が飛んでこずに反対の方向に行くともいわれ、これを贈られた人は喜んだといえます。また、還暦に赤い「ちゃんちゃんこ」を着て、赤い「頭巾」をかぶるのは、千支が一巡して最初に戻り、赤ちゃんに生まれ変わるからといわれています。



還暦の祝い 滝沢い氏蔵

## 特別の衣裳

## 死

者の衣裳は、湯灌<sup>ゆかん</sup>\*1の後、白の経帷子<sup>きょうかたびら</sup>を左前に着せ、手甲<sup>てっこう</sup>、脚絆<sup>きゃはん</sup>、頭陀袋<sup>ずたぶくろ</sup>に底のぬけた足袋とわらじをはかせ、頭には三角巾を着け、桑の木で作った杖を持たせ、道中姿にして納棺しました。死者が女性のときは、髪を結ったり口紅をつけたりして死化粧を施して納棺しました。この経帷子は、兄弟や子供たちが縫って着せます。これを縫うときは糸尻をとめず、縫う糸を切るときもハサミなどの刃物は使わないといえます。

葬式は、「トモライ」（弔い）といわれ、人の一生で最後の儀礼となります。

参列者の衣裳は、男性は婚礼に出席するときの衣裳と同じで、ふつうは銘仙や緋の着物に羽織を着ましたが、家によっては黒羽二重の紋付の着物に仙台平の袴をはきました。女性は、上から下まで白装束で、頭に綿帽子をかぶりしました。ただし、これを着るのは故人に近い人で、あとは地味な長着に黒の羽織でした。近親者で白装束を持たない人は、ソデカブリといって麻の白の襦袢の袖を頭からかぶりしました。現在は、黒羽二重や黒のヒッカエシに黒襦子の帯<sup>しゅす</sup>という黒づくめの衣裳になりました。



死装束 当館蔵



## 通過儀礼について

**通** 過儀礼とは、人が生まれてから死ぬまでの節目節目に体験する諸儀礼の総称で、人生儀礼・冠婚葬祭ともいいます。一般に妊娠・出産・育児から成人までの儀礼と、それ以後の結婚・厄年<sup>やくとし</sup>・年祝い・死の儀礼などをあげることができます。

誕生から幼児までは、生まれてから31～33日目のお宮参り、3歳の髪置<sup>かみおき</sup>・5歳の袴着<sup>はかまぎ</sup>・7歳の帯解<sup>おびとき</sup>の祝いがあります。幼児期の儀礼は、明治時代以来、七五三の祝いとして今でも盛んにおこなわれています。

成人への過程では、女子はカネツケ祝いでお歯黒をつけたり、男子は元服<sup>げんぷく</sup>・袴着<sup>えぼし</sup>・烏帽子祝いなどをしました。いずれも13歳から17歳ごろまでの儀礼で、今では満20歳で成人式がおこなわれるようになりました。

結婚は、それまで赤の他人であった二人が結びつくもので、それなりの手配りと手続きを必要としました。長い間いつくしみ育てた子供を手放す側でも、また新たな家族を迎える側でも、良きにつけ悪きにつけ生活に変化が起こります。その変化を好ましいものに、そしてその状態が永続するようにとの願いから、種々の儀礼が追加重複して現在にいたっています。

年祝いも長寿を祝う意味あいが優先されるようになり、教えで61歳の還暦、70歳の古稀、77歳の喜寿、88歳の米寿など、字画に合わせた祝いがおこなわれています。

人生最後の通過儀礼は葬式で、死の前後から埋葬または火葬にいたるまでに諸儀礼がおこなわれました。

通過儀礼は家族・親族の人間関係を越えて、広く社会の中でとらえられていたようで、出産の場合も、単に家族が一人増えるということではなく、村人が増えると考えられていました。子供は親兄弟だけが育てるのではなく、村人すべてに育てられ、村の氏神<sup>うじがみ</sup>の氏子として、社会の子供として育っていくことになるのです。

## 語句説明

- 産着 ※1 一つ身 — 背縫いのない<sup>まいじ</sup>嬰兒用の長着。後身頃<sup>うしのみごころ</sup>を並幅いっぱい<sup>なみ</sup>に仕立てたもの。
- 三歳 ※1 三つ身 — 3歳くらいに着る長着。身丈の3倍の布で前・後身頃<sup>おくみ</sup>・衽<sup>えり</sup>を裁つのでいう。
- 七歳 ※1 四つ身 — 3～9歳くらいに着る長着。身丈の4倍の布で前・後身頃・衽<sup>えり</sup>を裁つたもの。
- 成人 ※1 加護 — 神仏が力を貸し、守り助けること。
- 婚礼 ※1 江戸袷 — 江戸袷模様の略で、女性の長着の晴れ着の模様の一種。
- ※2 振袖 — 女性の着物の袖の一種で、袖丈の長いもの。  
本振袖・鯨尺2尺7寸(102cm)から3尺(113.5cm)
- ※3 中振袖 — 大振袖(2尺7寸以上の袖丈)と小振袖(訪問着)の中間の袖丈の長着で、未婚女性の晴れ着のこと。
- ※4 留袖 — 女性の着物の袖型及び既婚女性の礼服のこと。  
袖丈が鯨尺1尺3寸(49cm)から1尺6寸5分(62.5cm)
- 年祝い ※1 還暦 — 生まれた年の干支に還ることから名付けられ、本卦還<sup>ほんけがえ</sup>りともいう。
- ※2 古稀 — 杜甫の「曲江詩」の一節「人生七十古来稀」から名付けられた。
- ※3 喜寿 — 草書体で「喜」の字を「喜」と書くことから名付けられた。
- ※4 傘寿 — 「傘」の略字「傘」が八十に似ていることから名付けられた。
- ※5 半寿 — 「八十一」を組み合わせると「半」となることから名付けられた。
- ※6 米寿 — 「米」の字を分解すると「八十八」となることから名付けられた。
- ※7 卒寿 — 草書体で「卒」の字を「卒」と書くことから名付けられた。
- ※8 白寿 — 「百」の字の「一」を除くと「白」の字になることから名付けられた。
- ※9 上寿 — 人の命の長いことをさし、長寿を上・中・下に分けたうち最も上位に当たることから名付けられた。

### 特別の衣裳

- ※1 湯灌 — 死者の体をきれいにぬぐい清めること。

## 協力者一覧

(順不同・敬称略)

井上 浩	岸野 七郎	沼崎 一郎	松岡 初江	斎藤 勝治	本多 正男	増田 昭彦
宮野 和二	田中 貞夫	滝沢 ゑい	斎藤 修司	奥富 康裕	奥富 悦也	正木 郁子
清水 文子	中澤 俊一	横田 芳男	土淵 直江	三ツ木健次	金井塚正道	梅林ヨシ子
山田恵久子	久保田与一	市村 幸子	小林 富夫	狭山市入間川婦人会	毛呂山町歴史民俗資料館	
入間市博物館						

## \*参考文献\*

- |                        |                      |
|------------------------|----------------------|
| 『服装大百科辞典』 文化出版局        | 『新編埼玉県史』 別編1 民俗1 埼玉県 |
| 『狭山市史』 民俗編 狭山市         | 『民俗探訪事典』 山川出版社       |
| 『日本の文様—きもの・帯の図柄』 装道出版局 | 『国史大辞典』 吉川弘文館        |
| 『民俗学辞典』 東京堂出版          | 『年中行事・儀礼事典』 東京美術     |

## 人生の彩り—晴れ着—

発行 平成9年3月22日  
 編集・発行 狭山市立博物館  
 〒350-13 埼玉県狭山市稲荷山1-23-1  
 TEL 0429-55-3804 FAX 0429-55-3811  
 印刷・製本 光版社印刷株式会社